

# 色彩のもつ心理効果とそれを利用した映像表現

情報学研究科 情報学専攻

馬目 充章

## 概要

今、映像というとカラーの映像が普通であるが、一昔前では映像は白黒の映像だった。白黒の映像だと、映像表現もそうだが、感情の表現にも制限があった。その後カラー映像の出現により、映像表現が広がり感情なども映像から読み取ることが容易になった。それにともない感情の表現も広がっていった。これらのことから、色彩が映像表現にもたらす情報の量は大きいということが分かる。

色彩には様々な心理効果があることが多くの研究で報告されている。色の属性間効果、色の様相間効果、色の感情効果、色彩嗜好、色の意味的作用などである。私たちの生活の中には色彩のもつ心理効果を利用したものがあふれている。例えば、道路にある標識の色や、雑誌のデザイン、部屋の色など様々なところで利用されている。標識や雑誌では、注目をさせるように目立つ色を使い、部屋などの建築では用途によって色を使い安心を与えるなど、色彩の心理効果を利用している。

このように、映像がカラーになって表現の幅や、様々な分野で利用機会が広がっていることを考慮し、映像の中で色彩の心理効果をうまく利用できないかと考えた。そのために、実験 1 として、映像の中で色彩の心理効果が利用できるかを実験する。次に実験 1 の結果で検証されたならば、実験 2 として、より良い映像表現がないかを模索し実験をしていく。

実験 1 では、今回は青と赤の 2 色で実験を行う。元になる映像と、青または赤で加工したものを両方見てもらい、感情の変化を調べる。効果があるとして、実験 2 では、青で加工した映像を元に 3 つの加工した映像（人物のみにフィルターをかけた映像、背景のみにフィルターをかけた映像、背景は白黒で人物に青のフィルターをかけた映像）を作る。青で加工したものと 3 つの映像を見てもらい、どの表現法が最も心理効果を出しているかを調べる。

実験 1 の結果は、元の映像と比べて、青のフィルターをかけた映像は、両極端形容詞対尺度の青のイメージの側に変化し、赤のフィルターをかけた映像は、逆に両極端形容詞対尺度の赤のイメージの側に変化があった。このことから、動画の映像でも色彩の心理効果が利用できることが分かった。

実験 2 では、実験 1 で使用した青のフィルターをかけた映像と比べて、最も心理効果が出た映像は、背景は白黒で人物に青のフィルターをかけた映像になり、人物のみにフィルターをかけた映像も若干変化があった。背景のみにフィルターをかけた映像は元の映像より変化がなくなった結果になった。